



TITLE:

<研究活動報告 3> 視覚障害のある 盲学校教員のストレスの研究

AUTHOR(S):

坂田, 真穂; 菅佐, 和子

CITATION:

坂田, 真穂 ...[et al]. <研究活動報告 3> 視覚障害のある盲学校教員のストレスの研究. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 : 健康科学 : health science 2010, 6: 53-56

ISSUE DATE:

2010-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/108553>

RIGHT:

研究活動報告 — 3 —

視覚障害のある盲学校教員のストレスの研究

坂田 真穂*, 菅 佐和子**

はじめに

平成19年度の精神性疾患による教職員の休職者数は4,995人と15年連続で増加しており¹⁾、教師の職務上のストレスに焦点を当てた研究も多い。教師のメンタルヘルスに関する研究では、組織・個人双方向からのアプローチが重要だと指摘されている²⁾が、教師の個人的要因としての障害が教師のストレスに与える影響についての報告は非常に少ない。

現在、視覚障害者は全国で約31万人を数える³⁾。行動の自由を失うストレスを考慮すると、五感の中でも視覚を失うのが最も精神的な障害度が大いといわれている⁴⁾が、視覚障害のある教員のストレスとはどのようなものであろうか。

本研究では、盲学校に勤務する視覚障害のある教師を対象に、視覚障害のある教師が抱えるストレスを明らかにすることを目的とする。また、視覚障害のある教師のストレスに対してのサポートのあり方について

も検討する。

方 法

1. 調 査

盲学校に勤務する、視覚障害のある教員5名（30～50代の男性3名、女性2名）を対象に、対象者らが勤務する学校内の一室（7畳程度、防音構造）にて、2009年8月に調査を行った。

まず、調査協力の可否とともに面接日等の希望を尋ね、それを参考に面接日および時間帯を決定した。調査は、盲学校で視覚障害のある教師が抱えるストレスについて、事前に面接での語りのガイド（資料1）を作成し、それに基づいて半構造化面接で行った。なお、対象者の語りを尊重するため、順序や教示内容にこだわらずに進めた。面接内容は対象者の了解を得て、ICレコーダーにて記録した。平均面接時間は61.4分（42～78分）であった（表1）。

調査目的や方法、内容（面接を録音記録すること、

資料1 面接での語りのガイド

1. 現在どのような視覚障害がありますか。
2. 視覚障害の原因と現在に至るまでの経過をお話し下さい。
3. 教師として学校でどのような教科を担当していますか。
4. 教科指導意外にも別の業務をなさっていますか。あればどのような業務ですか。
5. 教師になって何年で、盲学校以外での勤務の経験はありますか。
6. 教師をしていてストレスに感じることはありますか。
7. 視覚障害があることで困難になっていること、ストレスに感じていることはありますか。あればどのようなことですか。
8. どのようにそれらの困難やストレスに対処なさっていますか。
9. 視覚障害を持つ教員が盲学校で教鞭をとるために、どのようなサポートが有効だと思いますか。
10. 視覚障害をもつ教員が盲学校で教鞭をとる意義は、どのようなものがあると思いますか。

表1 調査対象者の背景と面接時間

ID	年齢	性別	視力	原因	失明時期	教諭歴	担当教科	面接時間
01	42	女	右0・左0	先天性の眼疾患	幼少時	19年	理療科	52分
02	50	女	右0・左0	先天性の眼疾患	中2	27年	理療科	71分
03	49	男	右0・左0	幼児期の事故	中2	25年	理療科	64分
04	35	男	右0・左0	先天性の眼疾患	小4	9年	理療科	42分
05	56	男	右0・左0	先天性の全身疾患	40代前半	33年	理療科	78分

* 日本赤十字社和歌山医療センター
〒640-8558 和歌山市小松原通四丁目20番地
Japan Red Cross Society Wakayama Medical Center

** 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
Human Health Sciences, Graduate School of Medicine, Kyoto University

匿名であるがデータを研究に使用すること等)については、調査依頼時と調査開始直前に点字による説明用紙と口頭による説明にて確認した。調査への同意は、署名が困難なため、口頭で確認しICレコーダーにて記録した。

2. 分 析

視覚障害のある教員のストレスを検討するため、KJ法⁵⁾に則して、1) 教員としてのストレス、2) ストレスコーピングの方法、3) ストレス軽減のために求めるサポート、4) 教員として働く意義という4次元に関して、コード化単位を意味内容から区分し、コード化単位ごとに下位ラベルをつけた。また、下位ラベルを元にカテゴリー化し、データの概念化を図った。

結 果 と 考 察

調査対象者の現在の視力、視覚障害者になった原因、失明時期、教諭歴、担当教科等については表1のとおりである。また、各次元ごとに抽出されたカテゴリーはそれぞれ表2のとおりである。なお、「」は対象者の発言内容、()内は発言者(表1)のID

番号、【 】はカテゴリー名である。

1. 教員としてのストレス

全調査対象者(01, 02, 03, 04, 05)が、教員として勤務するストレスの原因として開口一番に挙げたのは【情報入手の困難さ】であった。これは、「書類などの多くは墨字なので読み書きは人に頼まなければならない(02)」のように、具体的には墨字の読み書きの困難などがそれにあたる。視覚障害者のうち、点字を使用する者はわずか12.7%である³⁾ことから分かるように、盲学校の生徒も大半は弱視者で墨字を使用しているため、「生徒への資料作りで他者の手を借りる必要がある(04)」現状がある。また、「点字にならない(03)」という図表の処理に至っては情報入手がほとんど不可能である。さらに、視覚障害者の外界の把握は、晴眼者が瞬時的であるのに対し、継時的であるといわれる⁶⁾が、「晴眼者は初めての場所でも一瞬で全体を把握できるが、私たちは時間をかけても全体はなかなか把握できない(05)」という発言からも情報の瞬時的・全体的把握の困難さが伺えた。

一方、「自由に行動できない(05)」など、【移動の困難さ】に関わるストレスを挙げた者が3名、また

表2 各次元ごとのカテゴリーとコード化単位

次元	カテゴリー	下位ラベル
1) 教員としてのストレス	情報入手の困難さ	墨字の読み書き 図表など点字に変換できない情報 瞬時的・全体的把握
	移動の困難さ	自由な行動や移動
	生徒の安全確保の困難さ	生徒の引率と安全管理
	人間関係	同僚の連携 晴眼者への要望
2) ストレスコーピングの方法	気を配る	タイミングや雰囲気の見計らい 日頃の人間関係の構築と維持
	割り切る	業務遂行の手段 代替手段の無さ
	工夫する	機器の活用 自己の練習や工夫
3) ストレス軽減のために求めるサポート	外出先でのガイド	外出時のガイドの申し出
	情報へのサポート	視覚情報の口頭による伝達
	正確な理解	困難さや辛さへの理解 出来ること、能力への理解
	相互援助の関係	晴眼者との相互協力
	サポートの自然さ	支援申し出の際の自然さ
4) 教員として働く意義	同じ障害者として生き方を示せる	就業や家庭生活など将来の生き方 日常の問題解決の方法
	適切な理解と指導	障害による困難や辛さへの共感と受容 障害への過剰な同情無しの率直な指導
	理療の面白さを教える	理療の良さ、面白さ 職業選択と働く意義
5) その他	自立への希求 障害受容の困難さ	就業や日常生活、社会的承認
		障害による心身の辛さ 障害の受容

「生徒の移動時に引率できない (01)」「移動時の生徒の安全管理ができない (04)」等【生徒の安全確保の困難さ】を挙げた者が4名いた。

本調査の結果から、視覚障害の特性である【情報入手の困難さ】と【移動の困難さ】が視覚障害のある教員にもストレスの中心になっていることが分かった。また、【情報入手の困難さ】に生徒への資料作りが含まれていたり、【移動の困難さ】が自身の問題だけでなく【生徒の安全確保の困難さ】にも繋がっている点は、視覚障害特有の困難が教師業務遂行の困難さにもなっていることが分かった。このことは、教師が「本務意識が高いにもかかわらず遂行できていない」という「役割不充足感」を強く感じると不適応傾向が高まる報告⁷⁾からも検討すべき重要な問題であると思われる。

さらに、「以前ほど教師同士が協力し合えなくなった (02)」「晴眼教師の生徒への指導に『もっとこうしてあげて欲しい』と感じることがある (05)」等、【人間関係】をストレス要因に挙げていた者も2名いた。松中(1997)が作成した視覚障害者用日常ストレスチェックリスト⁸⁾には「対晴眼者状況」という項目があるが、本研究でも晴眼者が時にストレッサーになり得ることが伺えた。

2. ストレスコーピングの方法

【情報入手の困難さ】や【移動の困難さ】、【生徒の安全確保の困難さ】によるストレスには、大別して、その不便さ自体によるストレスと援助依頼にかかわるストレスがあると思われた。援助依頼の方法がストレスコーピングの中心となる意見では、「点訳等は、相手の忙しくないタイミングを見計らって頼む (01)」「日頃から頼みやすい人間関係を作っている (04)」と【気を配る】ことや、「仕事なのだから仕方がない (02)」「こうしなくてはしようもない (03)」と【割り切る】ことでストレスの軽減を図っていた。ストレス要因のひとつである移動時にストレスを感じる人は、他者への「援助依頼」状況にもストレスを感じやすく、両者は切り離すことができない⁹⁾という報告があるが、本調査の結果では、援助依頼のストレスと関連しているのは、移動時に限らず、情報入手など、障害によるあらゆる困難においても同じだと思われた。

さらに、視覚障害者は視覚を触覚や聴覚で補う⁶⁾といわれているが、援助依頼を極力避けるために「機械(音声が出るパソコンソフトや点字が出るディスプレイ等)を駆使して補う (03)」や、「練習や工夫をすることで出来るようになる (04)」など、【工夫する】ことでストレスを軽減している者もいた。

3. ストレス軽減のために求めるサポート

「外を歩いたりするときにガイドの申し出があると

うれしい (03)」等の【外出先でのガイド】を希望する者が2名いた。また、「外の世界の話をつらふと欲しい (03)」という【情報へのサポート】への要望もみられた。さらに、「家族でもなかなかわからない (05)」という見えないつらさへの理解と、反対に、「見えないだけで、能力は活かせるのだとわかって欲しい (05)」というできることへの理解という、心理的サポートとしての【正確な理解】を挙げた者が3名いた。

それから、「視覚障害のある教師と晴眼の教師では出来る指導が違うので、互いに協力しあいたい (04)」という【相互援助の関係】を挙げた者が1名いたが、このことはサポートを一方向的に受けるのではなく、互いにやりとりする互恵的な関係を保つほうが感じるストレスはより低い⁹⁾という報告を裏付けるものであった。また「自然に手を差しのべて欲しい (05)」等、【サポートの自然さ】を求める者も1名いた。このことは、援助を行う際に、障害者の尊厳を守る大切さを示唆している。

4. 教員として働く意義

3名の対象者(01, 02, 04)が【同じ障害者として生き方を示せる】ことと答えた。具体的には、「視覚障害者でも子育てが出来るという希望を与えられる。(02)」、「工夫次第でいろんなことができるのだと伝えられる (04)」などである。このことは、同一障害の仲間による支援の効果¹⁰⁾という点からも重要であると思われた。

また、「同じ障害があるからこそ、生徒の悩みをきちんと受け止めてあげられる。(01)」という意見や、逆に「自分も同じ障害をもつ先輩だから『くよくよせずに練習しよう』など、晴眼の教師が気を遣って言いづらい指導もできる (02)」「同情せずに、怠けているところを怠けていると指導できる (03)」という【適切な理解と指導】ができることだと答えた対象者は4名(01, 02, 03, 05)いた。

また、現在は8.1万人(21.4%)の視覚障害者が就業している³⁾が、そのうち33.3%が「按摩・マッサージ・指圧・鍼・灸」という理療に従事している¹¹⁾。「職業選択の余地が少ないから『理療しかない』ではなく、理療の面白さを伝えたい (02)」や「東洋医学の本当の良さを教え、自分の仕事に意義を感じて働く大切さを伝えたい (04)」等、【理療の面白さを教える】という意義を感じている対象者も2名いた。

5. その他

中学生の頃、視覚障害があることで家族の重荷になっているのではないかと感じたという ID01 は「自立の手段として仕事に就くことは大事だった」と述べている。また、緊急時に避難できないからと子連れでの飛行機搭乗を拒否された経験をもつ ID02 は、「見

えていないからできないと思われすぎている。経験や工夫で、できることが本当はもっとある」と話すなど、【自立への希求】について言及した者は3名(01, 02, 05)いた。直接言及しないまでも、全ての対象者の語りの中に【自立への希求】の存在は伺えたように思う。

さらに、本研究の調査対象者は全員全盲の教員であったが、対象者の中で唯一、成人後に失明したID05は「失明後は眠りづらくなった」「音に敏感になり、騒がしい所が苦痛になった」「外出先で人の目を感じてしまう」「見たいという執着を捨てられない」などの苦悩を語り、【障害受容の困難さ】に言及していた。先天性の視覚障害者に比べ、中途失明者は、なぜ自分が失明しなければならないのか悩み、諦められないという心理に陥りやすい¹²⁾といわれているが、今後は、先天性視覚障害者と中途失明者の意識やストレスの違いについても考慮して検討する必要がある。

お わ り に

本研究を通して最も印象的であったことは、視覚障害のある教員が「視覚障害者体験としてよく晴眼者に目隠しをして歩かせたりしているが、あれは視覚障害者の実際とも少し違う。私たちは晴眼者に比べてずっと聴覚などで物事が判断できるのです。だから、晴眼者が考えているより、実際にはできることがたくさんある」と語ったことである。障害者支援といえば“できない”ことへの支援を考えがちだが、彼らの“できること”を活かす支援、健常者との相互援助につながる支援の探求こそが、視覚障害者のもう一方のニーズではないかと思われた。有効な支援を行うためには、晴眼者が視覚障害者のニーズを、現実にはより深く理解することが不可欠である。この視点は、今後の支援の構築に役立つと考えられる。

謝 辞

本調査に快くご協力下さいました調査対象者の皆様、面接室の提供などでお世話になりました教職員の皆様に心から感謝いたします。

文 献

- 1) 文部科学省：平成19年度教育職員に係る懲戒処分等の状況について。文部科学省，2008
- 2) 田上不二夫，山本淳子，田中輝美：教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題。日本教育心理学年報，2004：43：135-144
- 3) 厚生労働省：平成18年身体障害児・者実態調査結果。厚生労働省，2008
- 4) 河野友信：視覚障害者のストレス—心身医学的視点から。河野友信，若倉雅登編：中途視覚障害者のストレスと心理臨床。東京：銀海舎，2003：1-7
- 5) 川喜田二郎：発想法—創造性開発のために。東京：中公新書，1967：66-99
- 6) 田中農夫男：視覚障害と探求。田中農夫男，池田勝昭，木村 進，後藤 守編：障害者の心理と支援。東京：福村出版，2001：22-26
- 7) 松本良夫，河上婦志子：中学校教員の役割パターンと不適応。東京学芸大学紀要1部門，1986：37：135-148
- 8) 松中久美子：視覚障害者日常ストレスチェックリストの作成。関西学院大学人文論究，1997：47-3：159-168
- 9) 松中久美子：視覚障害とストレス。心理科学研究のフロンティア，No. 14。兵庫：関西学院大学出版会，2006：87-108
- 10) 長崎龍樹，柏倉秀克，新井美千代：視覚障害者の心理的問題の回復と支援方法に関する研究。第14回地域保健福祉研究助成財団法人大同生命厚生事業団報告集，2007：136-140
- 11) 毎日新聞社点字毎日編集部：点字毎日。毎日新聞社，2005
- 12) 新谷 守：視覚障害と成人。田中農夫男，池田勝昭，木村 進，後藤 守編：障害者の心理と支援。東京：福村出版，2001：32-35